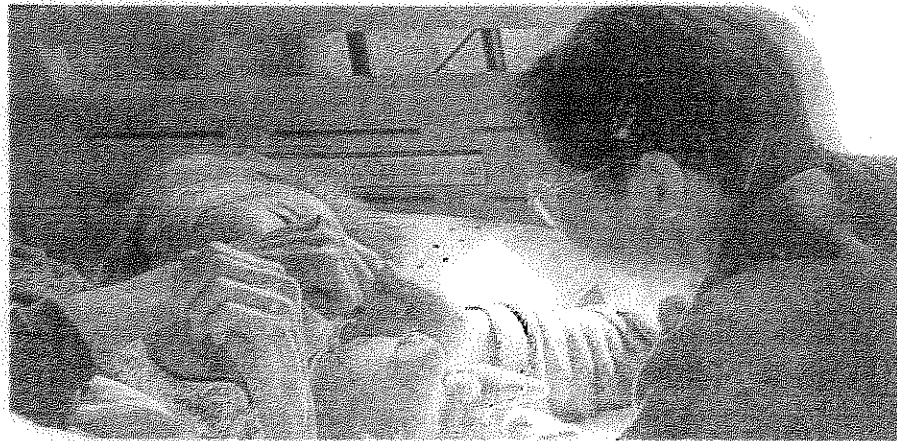


# 終末期介護 新しい形を

家族や親族に見守られながら自宅で迎える死をサポートする「看取り士」の普及活動に努める、一般社団法人「なごみの里」(米子市長砂町)代表理事、柴田久美子さん(61)が今年8月、初めての全国大会を東京で開く。団塊世代の看取りが本格的に始まる前に、北海道から福岡まで全国30人の看取り士と支援者、市民が情報交換し、終末期介護の新しい形を広くアピールする狙いだ。【北村弘一】



余命告知を受けた人に接する柴田久美子さん(右)。手と手を触れ合いながら、旅立つ人の最期に付きそう＝「なごみの里」提供

# 看

## 取り士、初の全国大会

2014.4.22

看取り士は、余命告知を受け、自宅での死の迎え方を受けた人が尊厳ある最期を迎えられるよう、本職ではないが、介護職者ら計400人が登壇し、看取り士の多くが別人、家族、医師らと相談し、初任者(旧ホームヘルパー)も受け、全国47支部に受け継がれているわけではないと訴える。

看取り士は、余命告知を受け、自宅での死の迎え方を受けた人が尊厳ある最期を迎えられるよう、本職ではないが、介護職者ら計400人が登壇し、看取り士の多くが別人、家族、医師らと相談し、初任者(旧ホームヘルパー)も受け、全国47支部に受け継がれているわけではないと訴える。

看取り士は、余命告知を受け、自宅での死の迎え方を受けた人が尊厳ある最期を迎えられるよう、本職ではないが、介護職者ら計400人が登壇し、看取り士の多くが別人、家族、医師らと相談し、初任者(旧ホームヘルパー)も受け、全国47支部に受け継がれているわけではないと訴える。

### 「認知度上げたい」柴田さん

島根県出雲市出身の柴田さんは大手ファストフードチェーンに勤務した後、福岡県の特別養護老人ホームで高齢者介護の道に入った。しかし、現場で目にしたのは、余命宣告された入所者が本人の希望を聞き入れられずに病院に送られ、延命治療を受けながら自由を奪われる様子だった。「何のためにこの世界に入ったのか」。自問するうち、理想の終末期介護を求めて、隠

岐諸島の知夫里島(島根県知夫村)に渡った。02年に看取りの家「なごみの里」を設立。10年間にわたり、島民の理解を得ながら、本人が望むままに自然死で看取る実践を重ねた。好きな言葉は「人生の、たとえ99%は不幸だとしても最期の1%が幸せならば、その人の人生は幸せなものに変わる」(マザー・テレサ)。



団塊世代の看取りが本格化する2025年には43万人の「死に場所」がないとの推計がある。恥ずかしながら、転勤族には家族が遠く、地域社会とも疎遠。自分の生きようを改めて考えた取材だった。(滋賀県出身、50歳)

8月24日、東京で

全国大会は8月24日午

後2時、新宿区の新宿区民ホール。看取り士の取

り組みをサポートする医

師や企業、メディアや福

祉関係者でつくる実行委

員会(委員長＝奥健一郎

・鹿児島大学教授)が主催

し、参加無料。奥委員長

や柴田さんら看取り士に

よるシンポジウムがあ

る。